



2021年5月 第19巻 第5号

かく語りき—聖人の言葉

「幸福は不幸という冠をつけて面前にあらわれる。

幸福を歓迎する者は、不幸も迎え入れねばならないのだ」

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

「無知が引き起こすのは、夜明けに生じて夕暮れにはなくなるような、消滅する結果だ」

…シュリー・シャンカラ

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・お知らせ

・2021年7月の予定

・2021年5月逗子例会

スワミー・メーダサーナンダ

- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

今月の予定

～お知らせ～

コロナウイルスの影響のため、引き続きライブストリーミングやズームなどの配信を中心に、皆様にお届けいたします。ズームに関するお問い合わせ、お申込みはこちらにメールをお送りください。 zoom.nvk@gmail.com

2021年7月の予定

・7月の生誕日

ヴィッシュダ・シッダーンタ暦では、2021年7月に生誕日はありません。

・7月の協会の行事

※スケジュールは変更になる可能性がございます。詳細は☞[ホームページ](#)をご覧ください。

7月03日（土）インド大使館

バガヴァッド・ギーター聖典講義

7月07日（水）8:30～9:30

ウィークリー・ウパニシャド・クラス

7月14日（水）8:30～9:30

ウィークリー・ウパニシャド・クラス

7月18日（日）11:00～16:30

逗子例会

7月21日(水) 8:30~9:30
ウィークリー・ウパニシャド・クラス

7月25日(日) 14:00~16:00
ラーマクリシュナの福音勉強会
←第4日曜に変更

＜ホームレス・ナラ・ナーラーヤナへの奉仕活動＞

日程：通常 毎月 第4金曜日
現地でのお食事配布など。
お問い合わせ：佐藤
urara5599@gmail.com

＜ハタヨガ・クラス＞

日程：通常 毎月 第1、第2、第4
土曜日 10:30~12:00

2021年5月返子例会

「シュリー・チャイタンニャ・デー ヴァの教え」

スワミー・メーダサーナンダ

今日のテーマは15世紀のベンガルの聖者シュリー・チャイタンニャ・デーヴァの教えについてです。『シュリー・ラーマクリシュナの福音』の中にはシュリー・チャイタンニャに関連した場面があります。シュリー・ラーマクリシュナがコルカタのスター劇場に、ギリシュ・チャンドラ・ゴージュが書いたシュリー・チャイタンニャの生涯をもとにした「チャイタンニャ・リーラ」という芝居を見に行く場面です。

『ラーマクリシュナの福音』 第28章『スター劇場にて(一)』の一部を読みましょう。

音楽を聞きながら、師はサマーディにお入りになった。幕がおり、オーケストラは続いた。

(新しい場面。シュリヴァースと他の信者たちがアドヴァイタの家の前で話をしている。ムクンダがうたう)

もう眠るな、おお心よ、いつまでお前は、

マーヤーの眠りの中にとらわれて寝ているのだ。

お前は誰か、なぜ生まれたのだ、お前の真の「自己」は忘れられている。

おお心よ、もう目を開け、そして悪夢から目覚めよ。うつり変わる人生の見せかけに、しがみついているなんて馬鹿だ、お前の中には永遠の至福が息づいているのに。

闇から出てこい、おお愚かな心よ、出てきて、さし昇る太陽にあいさつをせよ。

シュリー・ラーマクリシュナは、歌手たちの声をたいへんおほめになった。

(もう一つの場面。ニマイは家にいる。シュリヴァースが訪ねて来る。彼

はまず、サチに会う。母は泣いて言う、
「息子は家の仕事に身を入れません。
長男ヴィシュワルーパはすでに世を棄
てました。それ以来、私の心はいたん
でおります。いまはまた、ニマイも兄
のあとを追うのではないかと心配で
す」

ニマイがやってくる。サチはシュリ
ヴァースに言う、「彼をごらん下さい。
涙がほおから胸までつたわっています。
どうしたらあのような考えを棄てさせ
ることができるのか、どうぞ教えてく
ださい」

シュリヴァースの姿を見て、ニマイ
はその足にとりつき、目にいっぱい涙
をためて言う、「ああ、尊敬するお方、
私はまだクリシュナへの信仰を得てい
ません。このみじめな人生はつまらな
い。クリシュナはどこにおられるので
すか、どうぞ教えてください。どこに
行ったらクリシュナにお目にかかれる
のですか。おくびに野の花の花輪をか
けた青いお方にお目にかかれるよう、
あなたの祝福をこめた御足の塵をいた
だかせてください」

シュリー・ラーマクリシュナは M を
ごらんになった。彼は一心に何か言お
うとなさるが言えない。感動で声がつ
まったのだ。涙はほおをつたって流れ、
シュリヴァースの足にしがみついで
「私はまだクリシュナへの信仰を得て
おりません」と言うニマイを、ひたと

見つめておられた。

(ニマイは学校を開いた。しかし彼
はもはや、生徒を教えることができな
い。彼のかつての教師ガンガダースが
やってきて、世間の務めに心を向ける
よう彼を説得する。彼はシュリヴァー
ースに言う、「よくきけ、シュリヴァー
ース、われわれもやはりブラーミンだ。そし
てヴィシュヌ神のおまつりに奉仕して
いる。だがあなた方は、ニマイの社会
的将来性をだめにしようとしているの
だ」)

師 (M に) 「あれが世間的に賢い人び
との忠告だ。『あれ』と同時に『これ』
もせよ、と言う。世俗的な人が靈性を
教えるときには必ず、世間と神との妥
協をすすめるのだ」

M 「そうです。おっしゃるとおりでご
ざいます」

(ガンガダースはニマイに向かって
議論をつづける。彼は言う、「言うまで
もなく、あなたは聖典に精通している。
私といっしょによく考えてくれ。世間
の務めよりも大切な務めがあるものか
どうか、話してみてくれ。あなたは在
家の人だ。なぜ在家の務めを無視して、
他人の義務を行おうとしているのか」)

師 (M に) 「気づいたか。彼はニマイ
に、妥協をするようすすめているのだ

よ」

M「そうでございます」

(ニマイはガンガダースに言う、「私はわがままから在家の務めをないがしろにしているわけではありません。むしろ反対に、あらゆる面を大切にしたいと願っています。ところが師よ、私を引きずっていくものはいったいなんであるのか、私には分からないのです。私はどうしたらよいのか分かりません。岸にしがみついていたのですが、それができないのです。私の魂がさまよい出るので。私は無力です。私の魂はたえず、無限の大海にまっさかさまに飛び込みたがっています」)

師「ああ！」

(場面は変わる。ニッテヤナンダがナバディーブについた。探したあげく、彼はようやくニマイにあう。ニマイもやはり彼を探していたのだ。彼らが対面すると、ニマイは彼に言う、「私の生涯は祝福されている。私の夢は実現した。あなたは夢で私の前に現れ、そして姿を消されたのだ」)

師は感動に声をつまらせて、「ニマイは、自分はすでに夢の中で相手に会ったと言っている」とおっしゃった。

(ニマイは恍惚とした気分になり、

アドヴァイタやシュリヴァースやハリダースやその他の信者たちと話をはじめ。ニターイは、ニマイの気分にあふさわしい歌をうたう)

クリシュナはどこだ、私のクリシュナはどこにいるのか。

「彼」は森にはいない、いとしい友たちよ。

私にクリシュナをくれ、私のクリシュナをつれてきてくれ。

ラーダーのハートは、「彼」のことしか知らない。

この歌をきくと、シュリー・ラーマクリシュナはサマーディにお入りになった。長いあいだ、その状態にあられた。

シュリー・チャイタンニヤの印象

シュリー・チャイタンニヤはベンガルの小さな村ナバディーブで1485年に生誕されました。私はその生誕 500 周年となる 1985 年に、ナバディーブを訪れる幸運に恵まれました。その時には、小さな村は大きく発展していました。政治的には共産主義が根付いていたにもかかわらず、町全体はお祝いムードに満たされていました。道は春節で使われた赤い粉がまかれ、人々は、シンバルとドラムの伴奏で、主ハリと主チャイタンニヤの栄光を歌い踊っていました。町全体が歓喜、歌、踊り、信仰、祭りの雰囲気、信じられないほどの

光景でした。

シュリー・チャイタンニヤの生涯は48年と短いものでしたが、インドのベンガル州、アッサム州、オリッサ州、マニプール州に与えた影響はとて大いものでした。シュリー・チャイタンニヤはベンガルのヴィシュヌ派の創設者です。主ヴィシュヌの信者をヴァイシュナヴァと言います。ヴィシュヌ派にはラーマヌージャ、マドヴァチャーリヤなど、さまざまな派がありますが、シュリー・チャイタンニヤが創設したのは、ベンガルのヴィシュヌ派、つまりガウディア ヴィシュヌ派です。シュリー・チャイタンニヤはベンガル州だけでなく先ほど述べた州で、文化、芸術、建築、文学、音楽について強い影響を与えました。

文化の影響

ベンガル語や他の言語で書かれた多くの美しいシュリー・チャイタンニヤの伝記があります。その生涯についてのお芝居もたくさん作られていますし、彼を称賛する歌も多くあります。シュリー・チャイタンニヤの絵画もたくさんあります。今日、私が先に歌った歌は、チャイタンニヤの出家前の名前ガウラーンガ（ガウラ）についての歌です。ベンガルで今もとても人気がある歌ですが、その中でガウラーンガという名前は何度も出てきます。もう一度少しだけその歌を歌います。

バジャ ガウラーンガ カハ ガウ
ラーンガ ラハ ガウラーンゲーレ
ナーマ レ!

ジェ ジャン ガウラーンガ バジ
エ、セイ（ハイ）アーマーラ プラー
ナ レ!!

歌詞の意味：

おお、信者たちよ、ガウラーンガの
御名を取れ

ガウラーンガの御名を唱えよ

ガウラーンガの御名を瞑想せよ

ガウラーンガの御名を歌うものは誰
もみな、私にはとても愛しい人です。

『ラーマクリシュナの福音』を読んだことがある皆さんは、シュリー・ラーマクリシュナがシュリー・チャイタンニヤ（ガウラーンガ）のさまざまなアイデアを説明したり、その生涯を例にとる場面を数多く思い起こすでしょう。また『福音』には多くのシュリー・チャイタンニヤと関わりのある話があります。

シュリー・チャイタンニヤはキールタンのグループを率いていました。ここでは多くの信者がドラムとシンバルに合わせて歌ったり踊ったりしていました。ある時、シュリー・ラーマクリシュナは、シュリー・チャイタンニヤが率いるキールタンのグループのヴィ

ジョンを見る経験をしたと思いました。そうすると、シュリー・チャイタンニャがドッキネッショナルのパンチャヴァティからカーリー寺院まで大勢のキールタンのグループを率いているヴィジョンを見ました。そのヴィジョンでは、何千もの人々がシュリー・チャイタンニャに導かれており、その中には彼の友で弟子でもあるニッテヤナンダも、上げた手を前後にゆっくりと揺らしていました。その行列の中には、マスター・マハーシャヤ（Mさん）とバララム・ボシュもいました。どちらも前世ではシュリー・チャイタンニャに従っていた、とシュリー・ラーマクリシュナは信じていました。

マハー・マントラ

私たちが聞くもう一つの歌は「ハレクリシュナ ハレ クリシュナ クリシュナ クリシュナ ハレ ハレー / ハレ ラーマ ハレ ラーマ ラーマ ラーマ ハレ ハレー」というものです。この歌では主の御名が16回繰り返されます。メロディーは変わりますが、歌詞は同じです。これは「マハー・マントラ」と呼ばれることもあります。ヴィシュヌ派の信者たちは、主ヴィシュヌに対する最も大事な礼拝の一つとして、このマントラをたびたび繰り返し唱えます。イスコン(クリシュナ意識国際協会)のメンバーが、私的な場や公共の場で右手に小さなマーラ（数珠）入れを持ち、数珠をくりながら、この

マントラを唱え続けているのを見たことがあるかもしれません。彼らは「ハレ クリシュナ ハレ クリシュナ クリシュナ クリシュナ ハレ ハレー・・・」を唱え続けるのです。このチャンティング [神の名やマントラを唱える] はシュリー・チャイタンニャが取り入れました。

このマントラ朗誦は、ベンガル州、オリッサ州、オリッサ州、マニプール州という狭い地域のものでしたが、今は、イスコンをとおして、世界規模のものになりました。ニューヨークの街頭でさえ、主ジャガンナートにちなんだラタヤトラ（車祭）があり、イスコンの信者が馬車を引き、手を上にあげて「ハレ クリシュナ ハレ クリシュナ クリシュナ クリシュナ ハレ ハレー」とマントラを歌うのが見られます。これはとてもユニークな光景なので、西洋のメディアの注意を引いたこともありました。「ハレ クリシュナ ハレ クリシュナ クリシュナ クリシュナ ハレ ハレー」と歌いながら、ニューヨークの街を手を上げて踊るインド人信者のような服装の白人の姿はものめずらしく、神への信仰の示威活動という目的とは無関係に、幅広い聴衆に放送するメディアにとっては格好の材料だったからです。

シュリー・チャイタンニャの出現の背景

シュリー・チャイタンニヤのシュリー・クリシュナへの信仰がはぐくまれた背景は何だったのでしょうか？ 当時、インドの統治者はイスラム教徒で、イスラム教徒によるヒンドゥ教徒への迫害がありました。ヒンドゥ教徒はイスラム教徒を恐れ嫌っていたし、イスラム教徒もヒンドゥ教徒を嫌っていました。ヒンドゥ教の社会には、さまざまなカーストがあり、上位カーストの人々は下位カーストの人々を軽蔑し、ある特定のカーストの人々からは、触れられることさえ認めませんでした。そのように、多くの種類の憎しみと差別が社会に広がっていました。一方、宗教の名のもとに行われる多くは、世俗的な楽しみ的手段としての役割だけを果たしていました。宗教の実践者の中には、超能力を得ることだけに興味がある者もいました。ヴェーダーンタ哲学は狭義に理解され、つまらない哲学に低められていていました。ですので、インドの社会的、宗教的状况は、嘆かわしいものとなっていたのです。社会の不和と、宗教の名もとの非宗教的な行いが、シュリー・チャイタンニヤが生まれた1485年のベンガルの姿です。

シュリー・チャイタンニヤの幼少期

シュリー・チャイタンニヤが生まれたナバディープという村は聖典と哲学、特にニヤーヤ哲学の勉強で有名でした。インド哲学にはニヤーヤ、ヴァイシェ

ーシカ、サーンキヤ、ヨーガ、ミーマンサー、ヴェーダーンタという六派があります。ガウタマ賢者がニヤーヤ哲学を興したのですが、後にベンガルのサンスクリット語の学者たちがニヤーヤ哲学の新しい派、ナヴィヤ・ニヤーヤ派（新論理版ダルシャナ派）を設立しました。

シュリー・チャイタンニヤは貧しいブラーミン家庭の次男として生まれました。貧乏ではありましたが、とても信心深い両親で、母はサチ・デヴィ、父はジャガンナート・ミシュラという名前でした。長男ヴィシュワルーパは聖典の学者になりましたが、真理を悟るには家庭生活と世俗を放棄するしかないと思い、最終的に学者をやめて僧侶になるために出家しました。このことは両親をととても悲しませましたが、そんなとき生まれたのがチャイタンニヤです。色白でハンサムな少年は出生時にはヴィシャンバラと名付けられました。のちに彼はニマイというニックネームで知られるようになりましたが、それは彼がニームの木の下で生まれたことにちなんでいます。また、色白だったことからガウラ、またはガウラーンガ（色白な人）とも呼ばれました。

子供のころのいたずら

彼はとても聡明でいたずらっ子でした。このことはシュリー・クリシュナとスワミー・ヴィヴェーカーナンダ

のやんちゃな子供時代の話をおぼえさせます。彼らは子供のころのいたずらややんちゃなふるまいという点が似ていますね。ガンジス川の川岸は幼いニマイの格好の遊び場でした。彼はいつもいたずらに友達を引き込みました。そのひとつの例を言います。ナバディープはガンジス川の川岸にあります。皆さんご存知のように、ヒンドゥ教徒はガンジス川がとても好きです。ガンジス川で沐浴し、礼拝し、ガンジス川に捧げものをし、川岸に座って神を瞑想します。

日本の海岸線に住む人々の生活の中心が海であったように、ガンジス川沿いの村々の生活は、ガンジス川が生活の中心でした。腰まで深くガンジス川の中に浸かり、目を閉じて完全に集中してマントラを唱える人がいますが、ニマイとその友達はそのような礼拝者を見つけると、そうっと川に入って礼拝者の足を引っ張りました。この騒動は礼拝者をかなり怒らせたことでしょう。これはニマイとその友達の遊びのひとつでした。

また、神への捧げものを入れた盆を持ってきて、目を閉じて神が捧げものを召し上がっているところをイメージする礼拝者もいました。彼らが目を開けると、神ではなく、代わりにニマイと友達が捧げものを食べて、走って逃げるのが見えました。しかし、礼拝者

たちは無知だったので、それがニマイ、つまり、礼拝者たちが食べ物を捧げた神の化身そのお方であった、ということとは分かりませんでした。

もう一つのいたずらは、母親たちが赤ん坊を連れてガンジス川に沐浴に来た時のエピソードです。お母さんたちが沐浴している間、赤ん坊は布にくるまれて川岸に置かれていました。ニマイと友達はこっそりと近づいて眠っている赤ん坊を揺さぶったり驚かせて泣かせ、憤慨しているお母さんたちを川から連れだして、泣いている赤ん坊の世話をさせました。

シュリー・クリシュナの母ヤショーダも、ご近所から幼いゴパールをいたずらやからかいや悪ふざけのことでしょっちゅう文句を言われましたね。ついにニマイの母サチは、叱っても厳しくしてもニマイの行動を変えることができないので、幼稚園に入れることにしました。

ニマイ先生（パンディット）

ニマイはとても頭が良かったので、早いペースで勉強がすすみました。このことはニマイの両親にも伝えられましたが、長男が学者になり世俗を放棄する結果となったので、両親はニマイも兄のあとを追わないかと心配になり、学校をやめさせました。このことは、ニマイのいたずらをエスカレートさせ

たので、母サチは常に町民から苦情を言われました。両親は、もしニマイをこのまま放っておくと誰も彼を制御することはできなくなると思いました。困り果てた両親はニマイを学校に復学させました。そうして彼もまた素晴らしい聖典の学者となったのです。16歳の時に彼は自分の To1（学び舎、学校）を開きました。彼は学者としても教師としても、とても有名になったので、国中から生徒が彼のもとで学ぶためにやってきました。

聖典の議論に熟練していることで有名な学者たちがいました。かつては、学者としての偉大さは、聖典の一節についての議論で別の人を打ち負かす能力で決まりました。ですので、名声を得るために学びの場で有名なナバディーブにやってきて、そこにいる学者たちと議論しようとする学者もいました。学者たちがそういった意図でやってくると、ニマイは彼らの挑戦を受けました。しかし誰もニマイを打ち負かすことはできませんでした。このようにして、ニマイ（ガウラーンガ）の名声は広く行き渡ったのです。

信仰の実践にいどむ

有名になったニマイ先生はラクシュミというとても美しい女性と結婚しました。しかしある時ニマイは外出先で、妻が蛇に噛まれて死んだことを知らされました。その後ニマイのお父さんも

亡くなりました。この二つの出来事はニマイに大きく影響しました。彼はこの世の無意味さ、非実在性、はかなさを考え始めたのです。ニマイの両親は信心深かったので、次第にニマイの神への愛は深まっていきました。そのような時に彼は、アディ・シャンカラーチャーリヤが設立したダシャナミ宗派のイーシュワラ・プリという出家僧に出会いました。イーシュワラ・プリは主クリシュナの名のもとにニマイをイニシエートしました。それ以来、ニマイは聖典を教えるよりも、クリシュナの御名を唱えることにより多く興味を示すようになりました。彼の周りにはシュリー・クリシュナへの同じような気持ちの信者がいたので、ガウラーンガ（ニマイ）は彼らに主ハリの御名を唱えるように導きました。

しかし、シンバルとドラムをたたきながら大きな声で何度も同じことを唱えられたら夜もろくに眠れない、とガウラーンガの信仰のあり方に賛成しない者もいました。彼らはこの振る舞いに対する不満をその土地のイスラム教の統治者であるチャンド・カジに申し立てました。チャンド・カジは、何人も街頭でキールタンをすることを禁じる、という法令を作りました。一般的に、普通の人はそのような法令に従わないことを恐れますが、ガウラーンガは自分たちはいかなる不道徳で非倫理的な活動もしていない、自分たちは主

の御名を唱えているのであって、それは非難されるべきことではない、と異議を申し立てました。

その後、ガウラーンガは多くの人々と非常に大きなキールタンのグループを組織し、ある決められた日にそのグループを率いてシンバルとドラムをたたき、神の名を唱えながら、ゆっくりと支配者カジの住まいに向かいました。カジはキールタンのグループの轟音が家に近づくにつれ大きくなるのを聞くと、おびえて家の中に隠れました。ガウラーンガはカジの家の前で行列を止め、カジに挨拶をして歓迎しようと親しみを込めてカジを呼びました。脅すつもりは毛頭ありません、ただご挨拶したいだけです、とガウラーンガは言いました。

カジが家から出てきて二人は顔を合わせました。カジは、ガウラーンガの謙虚で優しい言葉と、キールタンは決して誰にも害を与える意図などなく主の御名を唱えるだけだ、という説明に感銘を受けました。ガウラーンガは言いました。「あなたが『アラー』とお呼びになる神様と同じ神様を私たちは『ハリ』と呼びます。『アラー』も『ハリ』も同じ一つなのです」そう述べるガウラーンガの存在、態度、謙虚さ、見事なシンプルさにカジは大変感激したので、法令を取り下げました。そしてカジ自身がガウラーンガの崇拜

者となったのです。

ガウラーンガが最初の妻を失ったのはとても若い時だったので、母は再婚を望みました。そしてふさわしいヴィシュヌプリヤという若い女性が見つかりました。彼女もとても敬虔深い人物でした。そして、ガウラーンガは母と妻と一緒に暮らし、(先生として)少し教えもしましたが、ほとんどの時間は人々と共にチャンティングをしたり、靈的教えを与えて過ごしました。

チャイタンニャの出家

突然、ある考えがよぎりました。「私は母と幼い妻と共に家住者として生活している、私は靈性の教えを説いているが、そこには放棄というアイデアがある…。私には聖典の学者としての名声もある…そんな私が靈性を教えたところで、人々に本当の影響を与えられるのだろうか？」彼は自分の教えが次のような影響を及ぼしているのではないかと心配になりました。「ある人が神を知るために献身的な靈的生活を送ろうと思ったとき、同時に家住者としての生活を楽しみながら靈的生活を送ろうとするのではないか。私は放棄について語る一方で、人が人生で切望するすべてを密かに楽しんでいるのだから」この考えによって、ガウラーンガは真剣にこの世を放棄し、兄と同じように僧になることを考え始めました。

ガウラーンガはこのことが母と幼い妻に苦痛を与えることを知っていました。母は、まず長男が僧になったときに長男を失い、次に夫を亡くしました。それなのにガウラーンガもこの世を放棄すれば、母も妻も大きく落胆するでしょう。しかし最終的にはガウラーンガは僧になることを決めました。母がそのことを聞いたとき、彼女は気を失いました。時間をかけてニマイは母に次のように嘆願しました。お母さん、もしお母さんが出家を認めてくださらず、ここに留まるようにおっしゃるなら、私は苦しんで早死にしてしまいます。しかしもし祝福を与えてくださるなら、私は家を出ますが、そんな遠くではないところに住みます。そうすればお互い連絡が取りあえるでしょう。ガウラーンガが何度も嘆願すると、母はやっと出家を認めてくれました。シュリー・チャイタンニャの伝説にはその頃の多くの物語があります。ある晩、誰にも何も言わず、ガウラーンガはあたたかい家庭を去りました。それは主ブッダがその王国を去ったときの話とそっくりです。

それからガウラーンガはナバディープからさほど遠くないカトアという町で別のダシャナミ宗派のスワーミー・ケサヴァ・バーラティと出会い、サンニャーサになる得度を与えてくださるように頼みました。ケサヴァ・バーラティはその申し出を断りました。なぜ

なら、ガウラーンガがまだ若くハンサムで、結婚生活を送り、最近まで妻と母と共に家住者として過ごしていたので、僧侶としての生活を逸脱する可能性があると思ったからです。そこで、ケサヴァ・バーラティはガウラーンガが本当に僧となる準備と素質があるかを試すことにしました。そのようなテストで最も大事なものの一つは、味覚のコントロールです。味覚をコントロールできる者は、他の感覚もコントロールできるからです。砂糖がガウラーンガの舌の上に置かれましたが、舌の砂糖を溶かす唾液がにじみ出てくることはありませんでした。そして舌の上の砂糖は突風で吹き飛ばされてしまいました。これを見たケサヴァは、ガウラーンガが僧になるのにふさわしいと確信したので、ダシャナミ宗派のバーラティ派の僧にイニシエートしました。そしてガウラーンガはシュリー・クリシュナ・チャイタンニャ・バーラティという新しい名前を与えられたのです。

ケサヴァ・バーラティは彼らの御用達の床屋にガウラーンガの頭を剃るようには言いましたが、床屋はこれほどのハンサムな若者が僧になることにたいそう驚き、頭を剃るのを断った、と伝えられています。それでもガウラーンガが熱心に主張したので、床屋は言うとおりにしました。しかし、床屋はとても取り乱し、仕事道具をガンジス川に投げ捨て仕事をやめた、とも伝えら

れています。

シュリー・チャイタンニャ、プリに行く

母の願いを満足させるために、シュリー・チャイタンニャは宇宙の主、主ジャガンナートの神聖な寺院の場であるオリッサ州のプリに行き住むことにしました。なぜなら、プリでは毎年ジャガンナート祭（車祭）が催されるので、多くのベンガルの人々が巡礼に訪れるので、もしチャイタンニャがプリに住んでいれば、お互いに連絡を取り合うことが簡単だからです。そのためにシュリー・チャイタンニャは友達や従者らとともに、チャンティングをしながら、プリへと進みました。

クリシュナ ケーサヴァ、クリシュナ ケーサヴァ、クリシュナ ケーサヴァ、パヒマン

ラーマ ラーガヴァ、ラーマ ラーガヴァ、ラーマ ラーガヴァ、ラクシヤマン

この基本的な意味は「おお、主よ、私を養ってください、おお主よ、私をお守りください」です。「ジャガンナータ スワーミー ナヤナ・パタ・ガミー バヴァトウ メ」（おお、主ジャガンナートよ、どうか私にあなたのヴィジョンをお与えください）という節を加えることもありました。

それ以来、彼はプリに住み、巡礼のためにベナレスなど他の場所を時々訪れました。彼が特に好んだのは、ヴリンダーヴァンでした。プリにいるときは霊性の教えを伝えたり、信者や弟子たちと恍惚とした気分で主の御名を歌い踊りました。それ以外の時間、彼は主シュリー・クリシュナへの忘我の愛に没入していました。晩年彼は忘我の状態でほとんど屋内にいました。外から見るとほとんどじっとしているように見えたが、内側では彼は神様と交わり続けたのです。

シュリー・クリシュナ・チャイタンニャの逝去に関しては論争があります。一節によると、彼はプリの海を親愛なるクリシュナのヤムナ川だと思い、水に入って二度と出てこなかったそうです。もう一つは、チャイタンニャはジャガンナートの像とひとつになったので身体が見つからなかった、というものです。これらは、シュリー・クリシュナ・チャイタンニャの逝去と遺体が見つからなかったことに関する二つの推論にすぎません。

シュリー・チャイタンニャの教え

冒頭で言ったように、ヒンドゥ教の社会には多くの不平等があります。シュリー・チャイタンニャは、本当はたった一つのカーストしかない、それは神の信者というカーストである、と教えました。ブラーミン、クシャトリア、

シュードラなどのカーストはないのです。ブラーミンのような高位カーストの生まれであっても、もしその者が神の信者でなければ、その人は最低のカーストに属します。同じように、低いカーストの者でも、神の御名を唱えたり、神への愛を持つ者は、最高のカーストの者だと見なされます。インドの社会には多くのカーストと、さらにはサブカーストがありますが、シュリー・チャイタンニヤは社会に非常に多くの不平等を引き起こしたこれらのクラスの区別を排除しようとしてきました。このことはシュリー・ラーマクリシュナとシュリー・サーラダー・デーヴィーが抱いた、たった一つのカーストだけが存在する、それは信者というカーストだ、という見解と同じです。

シュリー・チャイタンニヤは、アラとハリは二つの別な神ではなく同じ実在なのだから、さまざまな宗教の信者同士が言い争う必要はなく、強制的な改宗は必要ない、と言いました。イスラム教徒はヒンドゥ教徒になる必要はないし、ヒンドゥ教徒はイスラム教徒を嫌うこともない、お互いに尊敬すべきである、と説いたのです。

シュリー・チャイタンニヤの時代には、宗教は儀式に過ぎないと見なされ、そのように実践されましたし、無味乾燥の哲学とも言われていました。しかし、シュリー・チャイタンニヤは神へ

の愛を説きました。どのように神を愛するか、どうやって神への愛を育むか。シュリー・チャイタンニヤの教えは宗教や霊性において最も重要なことです。そして、この点において、シュリー・チャイタンニヤは神の愛の権化でした。

シュリー・チャイタンニヤはご自身の教えを8つの節にまとめて書きました。

1) 主の御名は信者のハートを清め、世俗性を消し去る。

2) 神にはさまざまな御名があるが、一つ一つの御名は聖なる可能性を秘めている。主の御名を唱えるのにふさわしい時間などないのに、主の御名を味あわないとは残念だ。

3) 草の葉よりも謙虚であれ。木よりも忍耐強くあれ。うぬぼれないようにせよ、名誉や名声を求めな。常にハリの御名を歌いたまえ。

4) 富、従者、美しい乙女、超能力を欲してはいけない。ただ思い焦がれよ、主を思い焦がれよ。どうか神への無私の愛を授けてください、と。

5) おお、主よ、主クリシュナよ、私はあなたの召使いですが、世俗に浸っています。どうか私をあなたの蓮華の御足に避難させてください。

6) おお、主よ。いつになったら、あなたの御名を歌う歓喜で、目には歓喜の涙がたまり、言葉は喉につまり、身体中の毛が逆立つのでしょうか。

7) おお、主よ。もしあなたと私がほんの少しの間でも離れると、それがほんの一瞬であっても何年もの隔たりに感じ、涙は雨期の水のようにあふれ、この世の全てのものが空虚なものに見える、そんな日が来ますように。

8) おお主よ、たとえあなたが私を抱きしめようと、私から離れていようと、あなたが私を愛そうと、愛さずにいようと、おお主よ、あなただけが私の避難所です。

この8つのシャーストラ（教え）をさらに短くまとめたものは、すべての信者にとって非常に重要なものです。次の内容は、シュリー・チャイタンニャがヴリンダーヴァンで生きることを決めた信者ラグナートに、この霊性の教えに従い霊的生活を送るようにと伝えた教えです。

1) 「グラミーヤ - カター ナ
スニベ」

世間話を聞かない。

2) 「グラミーヤ - ヴァルター
ナー カヒベ」

世間話をしない。

3) 「バーラ ナー カーイベ」

美食をしない。

4) 「アール バーラ ナー
パリベ」

着飾らない。

5) 「アマーニ マーナダ」

弱者を大事にする。

6) 「クリシュナ - ナーマ

サーダ ラベ」

常にクリシュナの御名を唱える。

7) 「ヴラジェ ラーダー - クリシュナ

セヴァー マーナセ カリベ」

ヴリンダーヴァンにお住まいの

ラーダーとクリシュナに心で

お世話（無私の奉仕）する。

これらの実践のアドバイスの理由と効果はどのようなものでしょうか？最初は「世間話を聞かない」です。この意味するところは、仕事、政治、趣味、食べ物、ファッション、これらすべては世俗的なものなので、信者はそのような話を聞くべきではない、ということです。どうしてでしょうか？それは心を乱し、時間とエネルギーの無駄遣いになるからです。世間話を聞くと、霊的实践や神様に集中する十分な時間もエネルギーも持てません。だからシュリー・チャイタンニャは「世間話を聞いてはいけません」とアドバイスしたのです。「世俗話をしない」というのも同じ理由からです。

次のアドバイスは、「美食をしない」です。どうしてでしょうか？なぜな

ら、もし信者の心が美味しい料理ための買い物、準備、楽しみに追われると、美味しい食べ物への欲望がさらに強まるからです。味覚のコントロールは難しい。もし味覚をコントロールできなければ、他の感覚をコントロールすることは難しいので、霊性の生活はうまく送れません。だからこそ、スワミー・ケサヴァ・バーラティはガウランガの舌の上に砂糖をのせて、彼を受け入れるかどうかを試したのですから。

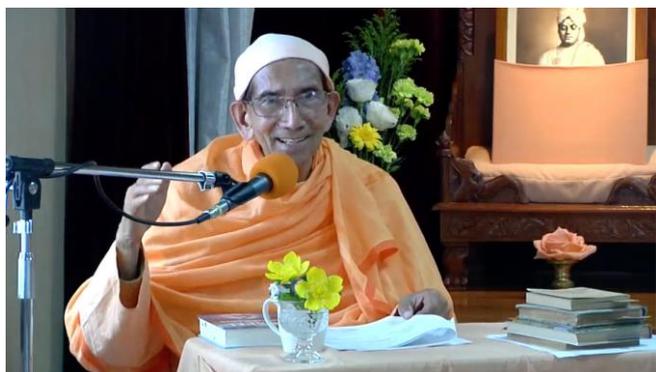
「着飾らない」が次のアドバイスです。服装への執着は、身体と自分の同一化を強めることにつながるので、このアドバイスは霊性の実践者にとって大事なことです。また、ファッションブルで高価な特別な服装、装飾品や宝石を身につけると、うぬぼれが大きくなります。それに着飾ると、他の人に見てほしい、褒めてほしい、という潜在的な欲望が生じます。

次は「弱者を大事にする」です。そのひとつの理由は、自分は他者より優れている、特に弱者よりも優れている、という自尊心を謙虚さへと変容させるためです。弱者の中にも神はお住まいではないですか？ つまり、自分が他者よりも優れているなどということはないのです。弱者を大事にすることで、私たちは謙虚さを身につけ、高慢な考えを取り除くことができます。

次のシュリー・チャイタンニャのアドバイスは「常に主クリシュナの御名を唱えよ」です。神様は清らかです、だから神の御名もまた清らかなのです。神の御名を常に唱えることには三つのとても重要な効果があります。ひとつ目は、ハートを清らかにする。二つ目は、神への愛が増す。三つ目は世俗的な考えから心を護ってくれる。心はじっとしてられません。何か考えていなければなりません。もし私たちが良い霊的な考えを心に与えなければ、しばしば否定的で世俗的なことを考えてしまい、それが私たちにトラブルを引き起こします。

最後は「あなたのハートにお住いのラーダーとクリシュナに心で奉仕せよ」です。ラーダーとクリシュナ、もしくは自らが選んだ理想神が、自分のハートに常にお住まいである、ということ想像してください。そしてその方に、さまざまな礼拝や個人的な奉仕を心でするのです。そうすれば、その方のご意志が、私たちがより神に近づけるように助けてくださいます。

これがシュリー・チャイタンニャ・マハープラブの教えの神髄です。それは私たちの霊的实践と目標到達のための理想的なものです。



忘れられない物語

好奇心旺盛な村人

ある小さな村に、いつも幸せそうで思いやりがあり、皆に親切な人物がいた。彼に会った誰もが、それまでよりも元気になり、幸福感が増し、とてもうれしい気分になった。ある好奇心旺盛な村人は、その人物が常に親切で元気をくれる秘訣をどうしても知りたかった。

ある時、彼に道で会った村人は尋ねた。「たいていの人自分勝手に、運命に満足していません。誰もあなたほど笑顔を絶やさないといいことはありませんし、あなたのように頼りにならないし、思いやりもありません。どうしてでしょうか、教えてくださいませんか？」

その人物は一瞬黙ってから、微笑んで答えた。「自分自身が平安であれば、世界中の誰とでも仲良くできます。自



分の内なる魂が分かれば、すべての人の中の魂も分かります。そうなれば、みんなに思いやりをもち、親切にすることは、あたり前のことになります。もし自分の思考をコントロールできれば、私たちは力強くなり、しっかりと安定するのです」

「これまでの習性或思考が心を構築しています。そして心はそれらにコントロールされています。私たちはこの構造から脱却せねばなりません。良い習性を増やし、意志で心をコントロールするのです。そうすれば、私たちに備わっている内なる善性或喜びがあらわれるでしょう」

村人は嘆いた。「でも良い習性を増やすのはものすごく大変そうです。古からの習性はしつこいので、変化のための努力は困難で果てしなくつづきそうです。いったいどうしたら思考に集中して思考をコントロールできるのでしょうか？ 並大抵のことではないと思います」

その人物は再び微笑んで言った。「それでも自分で努力するしかないのです。実践を重ねると、まずほんの一瞬ではありますが、心に平安が訪れます。そして、たゆまず努力を続けると、一瞬であった平安が長くなっていきます。この平安が、強さ、力、思いやり、愛、をもたらします。やがて自分と宇宙の

力 (Universal Power) とはひとつである、ということを知ります。このことが私たちを、異なる次元、異なる視点、異なる意識での行為、つまり、一小さくなく、自分中心でもなく、自我の制約を受けていない行為へと導くのです」

「あなたのお言葉を胸にしまっておきます」と村人は言った。「私は、人々があなたの内面的な強さを感じ取り、あなたにつけ込まないのを見てきました」

「友よ、善性は弱さのしるしではありません。善い性質は力や強さとしてもあらわれるのです。内面が平静であれば、私たちは幸せです。心が静まっていれば、怒りも恨みも存在せず、否定的な考えは芽生えません。このことが内なる喜び・満足・歓喜へと導きます」

「私は探求の旅にでることにしました。あなたが助言や説明をしてくださったおかげです」、そう言って、これから待ち受ける難題を受けて立つよう鼓舞された村人は立ち去った。

インターネットより

今月の思想

「お前さんが真実だけを語るなら、覚

えておかなきゃいけないことなんて何
ひとつないのさ」
…マーク・トウェイン

発行：日本ヴェーダータ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp